

3 ユリコみっくす りみっくす

ユリコみっくす りみっくす

もうすぐ体育の日。

といっても、体育祭は季節が違つし、文化祭ももうちよつとあと。それにもう高二も中盤すぎるから、自由な時間はないわ。

それでも、部活はちゃんとやらないとね。なんだつて、2度目の副部長なんだから。

「ねえ、ユリコ？」

ふりかえると、ほのかがフラスコ持って立っていた。

「今年はバイトしたの？」

ああ、去年はいろいろやったものねえ。

「いいえ、今年は勉強に集中よ。あと部活ね」

そして、体育の日が近いってことは

「でもプレゼンツの資金くらいはなんとかなるわで、そのプレゼンツをもらう人はどうなのかな？」

私が訊ねたら、いつの間にか私の隣の実験机に腰

かけて、

「なぎさは「このとこ、藤村くんといっしょよ」

なんか投げやりな感じで足をぶらぶらさせながら、ほのかが言った。

ひよつとして、イヤだとか？

「イヤってことじゃないのよ。べつに」

口に出す前に、ほのかに先回りされたわ。けどね、

「ただやっぱ、去年と同じにはいかないなあ、って」

ちよつと、口調が速いなあ。やっぱ、気には

してるのかな？

「それは、私ただって同じでしょ？永遠なんかないもの。銅があがいたって酸化銅になるだけよ」

「ろくしよー、ろくしよー」

ろくしよー 『緑青』、ね。ふざけた声でお互

いわらつたけど、私には見えちゃった。ちよつとさ

びしい笑顔、かな？

「うん。今度は、ちゃんとやらないとね」

ほのかに聞こえないくらいの声で、私はうなずい

たのよ。

半年前、今年のほのかの誕生日は、失敗しちゃったからなあ。なぎさんをプレゼントにしたてるつもりが、自分がプレゼントにされちゃったんだから。まあ、それは私のせいでもあるんだけどさ。

だから、今度こそなんとかしてあげるんだ、私が。

「ほのかもバイトはしないんだよね？今年はやっぱ塾いっばい？」

「ええ、まあ」

卒業したら、遠くに行くようなこと言ってたものね。勉強がんばらなきゃ、ってなるのはしかたないんだけど。

「部活どつする？私が部長のしごと代わってもいいけど　肩書きなんて関係ないしね」

3年の先輩たちは、半分引退しちゃったような感じ

だけど、ほのかが所属してさえすれば、だれもが納得するのよね。それこそ、ぬいぐるみに『ほのか』って書いて化学室に転がしといてもいいくらい。あとことは、私ひとりでも問題ないわ。

「うん」

「歯切れ悪いなあ〜えいっ！」

「ひやつ！」

脇をしたからつついたら、ほのかのからだか飛び上がった。よしよし。

「くすぐるぞー」

「もう、や、やめてよなきさ　あー！」

驚いた顔といっしょに、ぴたっ、とほのかの動きが止まった。

「あ、あはははは。やつぱりこころはいっばい、か。いいのいいの、気にしないから」

「ま、わかっちゃいるんだけどね。ええ。」

私はほのかから半分背を向けて、

「あーあ。ほのかにオトコができたら、なぎさん

大変だろうなあ。」

実験机に背中もたれながらちよつと伸びをしたら、「え？ な、なんで？」

両脇を手でガードしながら、ほのかが訊いてきた。しばらくはさわれないか。それはまあいいけど。

「なぎささんなら、まずケチつけるわね。顔がすっごくよかつたら、裏でなんか考えてそう」、よくなかつたら『ほのかと並べられるヤツじゃない』かな。」

「なぎさは顔で差別なんかしません!!。」

両手をこぶしにして、ほのかが近寄ってきた。

はいはい。わかってます。ほんとはそうでもない。

「でもとにかく、まずケチはつけるわよ。次は

そうねえ、『頭でつかち』とか『外面だけのヤツ』とか、とにかくどんな人でも悪い部分見つけようとするんじゃない？」

「そんなこと。」

ちよつとむすつとしちゃった顔を見て、私は見えな

いように苦笑いした。ほのかには、そうなのよね。

「でもね、たとえば 私がオトコつかまえてきたら、なぎささんはきつと、思いつきり応援する側に回ると思うわ。」

「ん？ あー!。」

むつとした顔の、眼だけがぼつと広がった。

「わかつた？ そういうこと。お父さんよねえ、なぎささんって。」

「せ、せめてお母さんって言ってあげてよ。」

ちよつと困って、でもちよつとうれしそうに顔、か

そつちも、考えなきやね。

夕方のラクロス部屋。練習終わったところに押し掛けたんだけど、私を見たらみんなぱーっと帰っちゃって、残ったのはひとりだけ。

志穂さんや莉奈さんが中心になって、みんなに目配めくば

せして部室から追い出しちゃってるんだもの。私かなにしようとしてると思っただのかな？

「で？あたしにどーしろ、っていうのよ？」

なんて考えてるひまもないわ。

ラクロス部のユニフォームを着て、クロスを抱えたまま両手を腰にあてたなぎささんを見ながら、私はちよつと失敗したかなあ、って思ってた。

そう、なのよね。なぎささんにどうこうできる問題じゃないんだもの。言っても困るだけじゃない。

「らぶらぶちゅつちゅな関係を控えて、とは言わないけどさー」

「だ、だ、だ、だーれがらぶ」

「わかってます。これからなんでしょ？そのレベルは。なぎささんくらいになると、もう幸せをねたむ気にもならないから安心して」

そう言つと、なぎささんはむーっ、って口むすんでこつちにらんできた。さっきのほのかとおんなじ顔。やっぱりお似合いよね。

「少なくとも、その点に関して化学部は全員なぎささんの味方よ。ほのかを傷つけない限りは、ね」

「そんなこと、あるわけ」

「意識して傷つけるなんて誰も思っていないわよ。でも人間、うっかりはあるから。ね、なぎさおとーさん？」

私が片目をつむると、なぎささんのむすつと顔が口をとがらせたわ。

「さっき、ほのかに言ったんだけどね。もしほかにオトコができたら、なぎささんがお父さんみたいになるなあ、って」

「ほんつと、心配性なんだからなあ」

すとん、とイスにこしかけて、頭をかきながら、なぎささんがそう言ってくれた。

ほのかのことになると、カンがいいのよね、この人は。本当に。

「そーよねー。なぎささんなら心配ないんだしさー」
「ん？なーにさ。変な言い方じゃない」

私はちろつと、目だけ動かして、

「藤村先輩が相手じゃあ、文句つけたくてもつづられないからねえ、ほのかには」

「い、いろんなところ知ってるじゃん。幼なじみなんだから、文句くらい」

ひとこと言ったら、ムキになった。やっぱりそんなこと感じながら、私は言葉を続けたの。

「だから、よ。悪いところも知ってる、でもなぎささんとなら大丈夫だって、わかっちゃってるんですよ」

「あー うん」

でもね、私なら文句つけられるんだよ。

「もしも、だけどね」

「ん？」

「その 藤村先輩が、なぎささんの身体からだだけが目当てだ、とかだったら、どうする？」

「そんなわけ！」

「実際にそつだとは言ってないわ。もし、よ」

「もしだつてそう！考えられないよ!!」

だよねえ。

中学のころから、もう3年以上だもんね。近くで見てるわけじゃない私にだつて、ちゃんとしたお付き合いってこういうものなんだな、って思えるくらいなもの。でも、

「そんな趣味はないけど。女の私だつて、なぎささんがその、『おいしそう』っていつのは理解できるのよ?」

「それは そう、思ってくれるなら、ちよつと、うれしい、かな」

目の前の顔が、ほーっと赤くなった。思ってくれて、私が、じゃないわよね。

「のろけてんじゃないの」

思わず持ってたプリントでぺしん、とたたいた。このくらい、いいわよね?」

「 やっぱり、こころはいっぱい、か」

ぱたん、と部屋のとびらをしめた瞬間、私の口から言葉が勝手にこぼれてった。

「あ、誕生日プレゼント、なんて考えてる場合じゃないわ。どうすればいいのかなあ、これ。」

「ねえねえねえ！ユリコちゃんユリコちゃんユリコちゃん♡」

次の日のお昼休み。口に放り込もうとしたおにぎりのすぐ向こうに、志穂さんの丸い顔が近づいてきた。

「ほあ？はひょん」

「化学部、貸してくんない？」

「ぐっ、げほげほっ！！」

「ああ、ごめんごめんごめん」

背中が少しあつたかくなつた。なでてくれるのはありがたいけど、いきなりなによ、それ？

「いやあ、化学室の奥のほうにたからものがある、っ

て聞いちゃったんだあ、あたし。」

莉奈に言ったらばかかしいって聞いてくれないんよ。ユリコちゃんなら聞いてくれるよね、ね♡」

ああ、はいはい。

志穂さんも、なかのいい莉奈さんと別のクラスになつちやつたから、よく私にからんでくるようになつたわ。私は私で、ほのかとクラスがわかれたから、ちょっとした時間の話し相手にはありがたいんだけど。

それにしても、化学室の奥、ね。

化学準備室の向こう、立ち入り禁止の部屋はたしかにあるわ。のぞいても壊れたイスとか机とかが積み上げられてて、とてもたからものとは関係なさそうだけど

「でもねでもねでもね、その向こうにあるんだって」

「なにが？」

「むかーしね、大好きどうしのふたりが、もあつたなかよくなりたくて作って、ずうつとなかよしでいられた、ひみつの部屋なんだって！」

もつと、ずつと、なかよく？

「ほらあ、わかるっしょ？その名前なんだから。ユリ・コ・ちや〜ん♡」

ああ、そういうこと。

「なーんか反応よくない。あれあれあれ？ひょっとしてそういうの嫌いなひと？」

「嫌いつてことはないけど 私とは関係ない世界だから」

ほのかとなぎささんのこと考えてたから、なかよく、に反応しちゃっただけなんだけど。そっち行っちゃうんじゃ、ねえ。

「ふーん。じゃしよーがないか。ノツてくれたら探検したかったんだけどなあ」

「ひとりで行けばいいじゃない」

「ほらほらほらあ、化学室の奥だからさ、一般生徒は近づけないんだよ」

化学室は、授業じゃないときは部員以外立ち入り禁止。扱ってる薬とか——特にほのかが暴走すると

——危ないから、なんだよね。

「ま、そんならしよーがないね。ほかいつてみるよ。じゃねー」

「はあ、あいかわらず、志穂さんは嵐みたいな子よねえ」

他の子のお昼グループにもぐりこんでる姿を見ながら、私はちよつと笑っちゃった。あれだけ話しておいて、あっさり他に行っちゃうんだもの。まったく、なかよくなるたからもの、なんて

でも待つてよ。ペローネ^ちって一応お嬢様学校だし私みたいな例外もいるけど、そこそこメルヘンな方もいらっしやるわ。っていうことは、よ。

「本当に、なかよくなるためのものが、残されてるかも——」

もし、もしも、よ。

「なぎささんは大学 藤村先輩と同じとこ、だっけ？でもって、ほのかはフランスに留学、だよね」

なぎささんとほのかが、離れていてもなかよくいられるもの。もし、それがあるとしたら。

このまま離れてしまつ前に、もし、それがプレゼントできるとしたら

「しよーがない。私が行きますか!」

「よっ、とっ、このっ!」

放課後の化学室。

化学部は本日お休みの張り紙を入り口にしっかりと貼つて、上下ジャージに着替えて、私は準備室の奥のとびらを開けた。

机とイスで壁みたいになつて、とても入れそうには見えないけど、

「なかなか、進めな うわわわわっ!?!」

机と机の隙間をねらつて身体を押し込んでたら、不意に周囲が軽くなつた。

思った通り、通れる道があつたんだ。とはいえ、

「いったっ!」って、なにこれ?これが、化学準備室の奥?」

ほこりで曇つたメガネを拭いて、もう一度見なおしてみたけれど、落つこつたところには大き目のソファアがひとつ。すぐとなりには本棚と机。本棚にはティーカップとポット 狭いけど、まるで、お茶会のための小部屋みたい。

「ああ、やっぱり、うちにはこういう方々がおいでだったん ん?」

部屋を見回してほつとした私の目に、違和感があつたの。机の上、なんだか見たことがあるようなないような。

机の上に何本も行儀よく並んだ、長細くてちよつと曲がつてるものから私はひとつ手にとつて、となりに置いてある単3電池をぽーっとしながら組み込んで、スイッチをオン。

そしたら、ういんういん言いながら、細長いもの

がぐるぐる動いてるじゃない。あーそっかあ、そうだよねえー

「ええっ!？」

思わず目がさめたわ。これってその アレ、よね？ みんなできゃいきゃい騒いで、先生に没収されてたティーンズ雑誌に載ってたアレ。本物を見るのはじめてだけど。

まさか、これが、『もっとながよくなれるもの』、って !!

「そのまんまかーいっ!!!」

はあ、はあ、はあ、手が勝手にブン投げそうになっただじゃないのー!

「まったくもう！ベローネにはもっとメルヘンなつていないのっっ!？」

ういんついんと動いてるアレを見ると、ちょっと頭が痛くなるけど、でも、待ってよ？

これを思い出しに いやいやいやいやー！何考えて

んのよ私はっ！

なぎささんはちゃんと彼氏いるんだから ほの
かならまだしも。って！

「ダメだっ！そんなんじゃない、そんなんじゃない、そんなのあるわけないっ！たらないっ!!!」

「どさざっ！

っ痛たあ！ぶんぶん手を振っちゃったから、どこかに当たったのかな。なによ、このいきなり上から落っこつてきたの、あら？

「本 ？」

かっちりした表紙でタイトルのない本。開いてみたら、ここを作った子の書いた日記だわ。

何枚かページをめくると、まるっこい文字の並び。1ページに1日ぶん、なにを見て、なにを思っていたのかをずっと、ずっと追って 私は、ぱたん、と本を閉じた。最後まででは読まないで。

「ごめんね。メルヘンじゃない、なんて言っ

日記をたぶんあつた場所に戻してから、電池入れたアレのスイッチを切って、私はなんとなくポケットに入れた。もう、ブン投げる気にはならないから。

「さあ、それじゃ戻るっか」

メガネをもう一度拭いて、顔を上げて、私はまた机の隙間からだをねじ込んだの。

「あ　きたー！」

「きたー来たよ、帰って来た!!」

あれ？誰かいるのかな。よい、しよっ、と、え!? 化学準備室に転がり落ちたと思ったら、ぼぶっ、となにかにつつまれた。

「なにやってるのよ、ユリコはもう」

薬用アルコールとせっけんのにおい　ほのかの

においに。

「え？なんで？」

「なんでじゃないっ！もう、崩して埋まったら危ないからって、追いかけることもできなかったじゃないさっ！」

今度はなぎささんのおい。

両側から抱きつかれて、私はしばらく動けなくなっちゃった。

「志穂に会って話きてなけりゃ、知らずにいたとこだよ！ったく、なにやってんだかなあ」

「もつとなかよくなれるもの、ですって？きまつてるじゃないの！絶対信じられるともだち　あなた

もよ、ユリコ♡」

「ほんと、わかってないんだよ。ユリコはさ。あなたが化学部で信用してんのは、ほのかとあんただけなんだから。言わせんなっての♡」

信じてくれてる、か

「じゃ、はい、これ。おみやげ」

「ん?」

スイッチをオンにしながら、私はポケットのものをなぎささんに渡した。

ま、私のもんじゃないし、誕生日プレゼントとは言わないけど。

「なに、この音立てて動いてるの。って、ちょっとこれっ!」

「知り合いに、ほかに彼氏もちはいないから、ね」
メガネのほこりを拭いて、できるだけにっこり笑ってあげたら、なぎささんの顔がゆでダコになってたわ。

「まだいらないよっ!!」

「はいはい。まだ、ね♡」

ほおら、なぎささんは、なぎささんだわ。藤村先輩でこころがいっぱいでも。ね、ほのか♡

「ああもっつ! そういうヤツなんだよ、ユリコはさあっつ!!」

真っ赤になってアレを放り投げたまま帰っちゃったなぎささんを、私がしばらく目で追ってたわ、

「ねえ、ユリコ。これって」

となりから、不思議そうな声がかかったわ。

あ、気がついたな、ほのか。

「そうね。いちども使われてないわよ、それ」

シリコンの部分はビニールで覆われたままだし、ホコリと違う白いコナ、作ったときの保護用のが薄くおおってるし。

それに、さすがの私も、使用済みのアレを友達に手渡したりはしないもの。

「どうしてかしら?」

両手でアレを持ち上げて、ふしぎそうに眺めてるほのかを見て、私は言うことにしたの。

たぶん、だけど。

「気づいちゃったのよ」

あの部屋で見たものを思い出していた私のあたま
 の中が、勝手に言葉になっていった。

「気づいた？」

「そう。ふたりでもつとなかよくなりたいたい、ってテ
 ンション上げちゃって、いろんな道具をどこからか
 そろえちゃって、専用の部屋まで作っちゃって。そ
 れで、さあ、　　ってどこで気づいちちゃったのよ。

自分と相手のからだじゃないものなんか、必要な
 い。なかよくなるのに、ものなんていらんない、って」

あの日記に、そこまでは書いてなかったけど、な
 んとなく私にはそう思えたの。ものことが途中か
 らなくなつて、相手の手と、きもちのことばかりに
 なつていったから。

「な、なんか、見てきたみたいと言つたのね、ユリコ」

「そりゃまあ、いろいろとね　　」

さっすがに、日記のことは言えないけど。先輩が
 たの名誉のためにも、ね。

「そっかあ　　誰か、いるのね、ユリコ♡」

へ？

「応援するわ。だれが反対しても、わたしだけは」
 ほのかがそつと、私にアレを手渡した。ほんとう
 のだから、ものみたいに　　って、いや、あの、ちよつ
 とあ!!

「絶対信じられるともだちだもの、ね♡」
 にっこり笑って言ってるけど、ちよつと

「信じなくていいから、そんなのっつ!!」

「それじゃそれじゃそれじゃ、もう必要ないよね？
 もらつてくからー」

私の手から、いきなり重さが消えた。例のアレが
 なくなつてる　　って、振り返つたら、ええっ!?

「し、志穂さん!？」

まあ、いい顔が、にっこり笑ってる。な、なんで？

「もつともつと、ずうつとなかよくなれた、でしょ、
 ユリコちゃん？」

じゃ、化学部に残しといたら大変なものはいとそ

ろえ、かいしゅーかいしゅー」

よくよく見たら、志穂さんの手に下げてる袋にはあの部屋にあったアレがぜんぶ入ってる　じゃ、じゃあ、あの部屋って他にも入口があって、あのたからものって全部、あとから置いたもの？

そういえばそうよ。あれだけ煽おほっておいて自分が行かないなんて、志穂さんらしくないわ。莉奈さんがダメでも、ほかに友達いっぱいいる子なんだもの。でもだったら、あの日記も、全部

「あ、それとね。日記は本物だから、って書いた本人が言ってたよ。安心して。じゃあねー♡」

え？ 本・人？

「日記　って？　まだなにか隠してるわね、ユリコっ！」

ほのかの声でわれにかえったけど、もう志穂さんは化学室にいなかった。

ふふ。そっか、いたんだ、書いたひと。もつとな

かよくなつて、そのままなかよいでいられているひと。ふふふふ。

「聞いているの、ユリコ？」

それならだいじょうぶ。ほのかとなぎさんにだつて、私たちがいるから、

「また危ないことしたら、今度は許さないわよ！」
だからおとなしく、怒られててあげるわよ。ほのか♡

—おしまい—